



TITLE:

<Book Review>Kirstin Pauka. Theater and Martial Arts in West Sumatra : Randai and Silek of the Minangkabau. Ohio University Center for International Studies (Monographs in International Studies Southeast Asia Series No.103), Athens, 1998, 261p

AUTHOR(S):

福岡, まどか

---

CITATION:

福岡, まどか. <Book Review>Kirstin Pauka. Theater and Martial Arts in West Sumatra : Randai and Silek of the Minangkabau. Ohio University Center for International Studies (Monographs in International Studies Southeast Asia Series No.103), Athens, 199 ...

ISSUE DATE:

2000-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56742>

RIGHT:

tary. The glossary and index also enable readers to examine specific themes dealt with in the epic, thereby making the *guritan* more accessible to readers.

What we would hope for in the near future is an audio-visual tape or a CD-ROM of a *guritan* performance from which this text derives. A *guritan* is not to be read through as a written text, but to be performed and interacted with. Similar to the well-known shadow puppet performances of Java, people wander off, chat with friends over strong coffee, and crowd around the singer. As shown in the text translation, the singer occasionally improvises and responds humorously to the audience. As we live in multi-media times, it would be a further asset to have a visual version of a *guritan* performance to promote greater understanding of South Sumatran highland society.

(Minako Sakai<坂井美奈子>・The University of New South Wales)

Kirstin Pauka. *Theater and Martial Arts in West Sumatra: Randai and Silek of the Minangkabau*. Ohio University Center for International Studies (Monographs in International Studies Southeast Asia Series No. 103). Athens, 1998, 261p.

芸術の豊富なインドネシアには様々な種類の舞踊があり、宮廷舞踊や仮面舞踊などは、日本でも上演を見る機会が増えつつある。しかしインドネシアにはその他にも多くの民俗舞踊、そして護身術舞踊のレパートリーが存在する。日本では空手や合気道などの護身術を舞踊の範疇に含めて語ることとはほとんどないが、これは「舞踊」と呼ばれる芸術の条件として音楽演奏と一体になっていることが重視されているからだと考えられる。カルチャーセンターなどで流行している太極拳も音楽を伴奏にしているが、身体の動きと音楽のリズムは必ずしも不可分である必要はない。インドネシアには、音楽伴奏を用いない、いわゆる護身術とならんで、音楽と有機的に一

体となった護身術舞踊<sup>注)</sup> プンチャ・シラット *pencak silat* があり、これは「舞踊」の重要なカテゴリーの一つとして認識されている。評者の研究地域である西ジャワでは、プンチャ・シラットは古典舞踊や仮面舞踊などとともに芸術大学の舞踊専攻科の科目の一つとなっているし、公的な機関の外でも多くの護身術舞踊の教室がある。

Kirstin Pauka による本書はこれまで研究蓄積のなかった護身術シレック *silek* と、護身術を主要な構成要素の一つとする上演芸術ランデイ *randai* に関するモノグラフである。まず、これらの独特な芸術ジャンルに関して著者が自らの実演経験に基づく興味深い貴重なデータを提供していることを非常に意義深く思う。

先に述べた護身術と護身術舞踊はそれぞれ、インドネシア語でシラット *silat*、プンチャ・シラット *pencak silat* という。本書の研究対象地域である西スマトラのミナンカバウの言葉ではシラットをシレック *silek* という。著者によれば、シレックは西スマトラの至るところで見られ、ほとんどの村にシレックのグループがある。多くの村では、集会所で少年たちにコーランとシレック、そしてランデイを教えている（第2章27-28頁）。西スマトラにおいて、シレックは、それを極めることが一人前の男性にとって不可欠な条件であるという重要な社会的位置づけをもつ。ランデイは、このシレックの中で用いられる円形舞踊ガロンバン *galombang* を中心に、物語の語りと民謡、音楽を組み入れ、それに演技を加えた、民衆演劇のジャンルである。ランデイもまた西スマトラの代表的な芸術ジャンルとされており、多くの村がランデイの劇団をもっている。

本書はランデイの歴史的起源、演者、テキスト、舞台、衣装、音楽、演技について概説的に紹介し、女性の演者の参入や現代的なステージ上演などの近年の変化について考察を加えている。それと同時にシ

注) martial arts dance の訳語としては、「護身術舞踊」の他にも「武術舞踊」という日本語が考えられる。この書評の中では、インドネシア語でシラットあるいはプンチャ・シラットのことを *seni bela diri* (「自分を守る芸」を意味する) と表現することが多いため、その表現に合わせて「護身術舞踊」という訳語を用いた。

レックをランデイの重要な構成要素として位置づけ、ミナンカバウの文化的表現としてこれらのジャンルを考察している。著者自身が実際にシレックを習得した経験に基づく具体的で分析的な記述が本書の随所に見られる。たとえば、第3章のシレックの習得過程(28-32頁)、第7章の打楽器と踊り手のスラッピングのパターンの図式化(106-112頁)、第9章における護身術を用いた戦いの展開方法の類型(130-144頁)などの記述は、十分な観察と的確な分析による成果として興味深い。また、第5章の上演テキストの考察においては、物語のレパートリーや、グリンダム *gurindam* という詩の形式に則って語られるテキストの分析、物語の基本的構成、様々な言語レベルにおける表現方法に関する記述が見られ、語りや言葉がミナンカバウの人々にとっていかに重要であるかという点が提示されている。さらに巻末には実際の上演テキストの記録が付録として添付されている。

本書は、基本的出発点として、舞台芸術ランデイと護身術シレックの二つを研究対象としており、著者の議論には最初からランデイはシレックを起源とする芸術ジャンルだという前提がある。たとえば、著者は第2章において、ランデイの歴史的記述の中でランデイの主たる起源説として、歌と舞踊、物語の語り、シレックをそれぞれ起源とする3つの説を検討し護身術シレックが起源であるという結論に至る(16-21頁)。しかし、そもそも護身術・語り・民謡・舞踊・音楽・演技などの様々な要素をもつ芸術ジャンルの起源を一つのジャンルに限定する意義はあるのだろうか。第5章で著者自身が示すように、物語やテキストもランデイの重要な構成要素の一つである。さらに、ランデイの起源に関する議論のプロセスは、先行研究の成果や調査地でのインタビューの結果などの提示が十分でないため、読者に対する説得力に欠けている。これはおそらく、著者の議論にランデイの起源はシレックであるという前提が存在するためだと思う。

著者は、本書の結論において、ランデイにおけるシレックは単に芸術形式上の構成要素であるにとどまらず、その哲学がランデイの上演を統合するという意味で重要な要素であることを指摘する(154頁)。こうしたシレックの哲学は、物語の登場人物が

シレックを極めるために修行の旅に出るという形で主題として強調される点、シレックの師匠が寛容で高德な人物として描かれている点、戦いの場面における高德なヒーローの戦い方はシレックをあくまで護身術の手段として用いており、観衆に争いの解決の適切なモラルを提供している点、などにあらわれている(154-155頁)。こうした結論に至るためには、ランデイという独特な芸術ジャンルの検討を出発点にして様々な構成要素を分析し、ランデイにおけるシレックの形式上・哲学上の重要性を指摘するに至るという記述のプロセスが必要だったのではないだろうか。個々の記述は興味深いデータを提示しているが、本書の全体的構成については再考の余地があると思われる。

最初に述べたように、本書はシレックとランデイに関する概説的モノグラフとしては貴重な業績である。上演の実践経験とインテンシブな調査の成果にもとづく今後の研究の深まりを期待したい。

(福岡まどか・国立民族学博物館)

*Overtured Chariot: The Autobiography of Phan-Boi-Chau.* Translated by Vinh Sinh and Nicholas Wickenden. Honolulu: SHAPS Library of Translations, University of Hawai'i Press, 1999, ix-x+296p.

Reading through this autobiography of Phan-Boi-Chau, the acknowledged father of Vietnamese nationalism, I was struck by three attributes of his generation of revolutionaries that had disappeared by the time of his death.

The first is the unusual candidness and remarkable humility that he and his comrades showed with regards to two of their weaknesses: political tactics and organizational resilience. Phan's account is littered with failures to collect arms consistently, botched attempts to attack the French and the inability to maintain security against French counter-attacks (often aided by the British, the Chinese and the Japanese). We do not read about astute revolutionaries or conspirators in this book; instead we are presented